

3月11日、東日本大震災という未曾有の大災害が起こりました。誰もが悲惨な現状を見て言葉を失ったことでしょう。巨大な津波に尊い命がたくさん奪われたこと、原発の被害で住み慣れた土地を奪われた人、そして今なお続く放射能汚染に風評被害、数え切れないほどの悲しみ、苦しみを残しました。

震災後、人命救助が優先され置き去りにされた動物達。なぜそんなことが起こったのか、原発から3キロ程の距離にお住まいだった方にこんな話を聞きました。その方は70代のご夫婦で犬のランちゃん(3歳メス)を飼っていました。地震の直後、すぐ公民館へ避難したそうです。すぐに自宅へ戻れるだろうと荷物も持たず、犬のランちゃんも家につないだまま来たそうです。一夜を公民館で過ごしたのですが、翌日早朝、公民館前にバスが数十台やってきたそうです。住民の方は一体誰が乗るのかも知らされず、きっと東電の社員でも乗るのだろうと誰もが思っていたそうです。しかし、突然そのバスへ乗るようにと誘導されたそうです。

ほとんどの方が訳も分からぬまま用意されたバスに乗せられました。しかし、ランちゃんの飼い主のお母さんだけはただならぬ気配を感じ、お父さんに犬のランちゃんを自宅から連れ出し軽トラの自家用車に乗せバスの後をついてくるようにと指示を出したのです。今にして思えば、お母さんの機転のおかげでランちゃんを置き去りにせずすんだのです。その後、飼い主さんはずっとランちゃんと離れることなく郡山の避難所を経て会津の東山温泉へと避難してこられました。

ランちゃんのように飼い主さんとずっと一緒にいられた子は本当に奇跡です。多くの方は、避難された先で家族同様に暮らしてきたペット達を按じ、心休まる日はなかったと思います。

原発の爆発を予測していた国や行政。ならなぜ一刻も早くその事実を告げ、住民一人ひとりに考える猶予を与えなかったのか。ペットや大切なものを持ち出させる術はなかったのかと悔やまれます。このことは明らかに人災です。

今も原発近くの町ではイヌやネコ、また牛などが奇跡的に生きています。子牛も生まれています。私たちは、地元住民の一時帰宅に合わせ協力してくださる方の車にできる限りのペットフードを乗せエサ播きをしてきました。今後も可能な限り行ないたいと思っています。

くまんちでは、ゴールデンウィーク中に関西、関東方面の仲間達と共に被災ペットを収容している福島市の施設にお手伝いに伺いました。「SORA(一社)」には約30頭以上のイヌネコ達が、また「みなしご救援隊」には約100頭以上のイヌネコ達がいました。その多くの子たちは里親さんの元で新しい生活を送っているそうです。

くまんちにも被災ネコさんが5匹やってきました。

飯舘村から救出された子だそうです。はじめは何をするにも「シャーシャー」で、猫パンチを繰り返す子や、耳を平らにするほど警戒心を示す子ばかりで、世話をする私も不審感いっぱいの眼差しにジッと見つめられ一瞬固まってしまうぐらいでした。この子達は一体何を考えているのだろうか……。きっと、変な奴に捕らわれてしまったと思っているに違いないと。

あれから6ヶ月、ようやく慣れてくれたのかウンチ掃除をする私の頭に猫パンチをくりだす子もあらわれひとまず安心してるところです。まるで私を飯係の使用人と思っている感じです。それもまあ嬉しいことですね。

